

## ● 論 説

中国古典美術の魅力

西洋の目に映った  
中国古典美術

クレイグ・クルナス

(翻訳 木島史雄)



「中国美術」はきわめて最近の発明であつて、せいぜい百年の歴史しかない。織物や、書作品、絵画、彫刻、陶磁器、そしてほかにも本書の中で言及される五千年にもおよぶ工芸・芸術作品のかずかずがあるにもかかわらず、これらのたくさん品の品をひとまとめにしてそれを「中国美術」とよぶという考えは、きわめて短い歴史しかもっていない。この国の歴代の支配階層は、芸術についての著作をもつし、芸術品を収集し、芸術を見せ消費することにかけては、長くかつ洗練された伝統をもっていたにもかかわらず、一九世紀以前には誰ひとりとして、これらすべての対象が同一の研究分野にふくまれるとは考えなかった。それどころか「中国美術」が生み出されたのは、一九世紀のヨーロッパおよび北アメリカにおいてであつた。そしてい

まだに西欧世界では、無条件の「芸術」、すなわち現実的には一般にヨーロッパの伝統を中心として、アメリカや世界のほかの地域へ広がっていった「芸術」と対照をなす研究対象のひとつとして「中国美術」というくくりが理解されている。ロンドンの「ナショナル・ギャラリー」<sup>①</sup>やコロンビア特別区のワシントンにある「ナショナル・ギャラリー・オブ・アート」<sup>②</sup>は、名前からすれば当然であるにもかかわらず中国で制作された作品を収蔵していない。

「中国美術」が一九世紀に発明されたことによって、いろいろな種類の美術品について語ったり、価値を評価した

※本論は「Craig Clunas, *Art in China*, Oxford University Press, 2009 の「はじめに」(Introduction)を訳出したものである。

りすることが可能になった。そしてそれらの発言はみなある意味で、「中国」それ自体をどう考えるかというメッセージとなつてゐる。東洋趣味をもつ西洋人たちは、中国は全体として均質な性質をもっており、そのいちばん本質的な部分は、外国人でなければ理解できないと考えていた。いっぽう一九世紀のドイツ人思想家ヘーゲルは、芸術は人間精神（のあらわれ）であると見なしていた<sup>③</sup>。この両者がであつて、「中国美術」（Chinese art）という独特の述語が生まれたのである。この「中国美術」という言葉が使われだすと、それによつて、変化よりも連続性、また対立よりも調和、そして相違よりも本質的な均質性が強調されることが多くなつた。言い換えれば、中国が、時間的／地域的を問わず受け入れてきた、内部的なさまざまな実際上の相違点が無視されるいっぽうで、中国と「西欧的芸術の伝統」との違いが強調されるのである。もちろん中国は物理的に巨大な国であつて、気候風土も生態環境もいろいろであり、この書物が記すことになる全期間を通じて、社会・宗教思想、支配階層の民族構成、政治権力や人口集中地域の地理的配置などといったことは、すべて移りかわつてきているのである。

本書は書名を、「中国美術」（Chinese Art）ではなく「中国の美術（あるいは「中国における美術」）（Art in China）」とした。ことさらにそうしたのは、以下の理由による。す

---

クレイグ・クルナス[Craig Clunas] オクスフォード大学教授 美術史

1954年、スコットランド・アバディーン生まれ。ケンブリッジ大学卒業、ロンドン大学 SOAS (the School of Oriental and African Studies) で博士号取得。ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館に勤務の後、ロンドン大学 SOAS を経て、2007 年より現職。

〈主な著作〉

*Art in China*, Oxford University Press, 2009. ISBN: 978-0199217342

*Fruitful Sites: Garden Culture in the Ming Dynasty China*, Reaktion Books, 1996. ISBN: 978-0948462887

*Superfluous Things: Material Culture and Social Status in Early Modern China*, University of Hawaii Press, 2004. ISBN: 978-0824828202

*Screen of Kings: Royal Art and Power in Ming China*, Reaktion Books, 2013. ISBN: 978-1780231037

*Chinese Painting and its Audiences*, Princeton University Press, 2017. ISBN: 978-0691171937

〈邦訳著書〉

『明代中国の庭園文化』中野美代子・中島健訳、青土社、2008 年

『図像だらけの中国——明代のヴィジュアル・カルチャー』武田雅哉訳、国書刊行会、2017 年

---

なわち非常に範囲が広く、形式においても、時間的にも、素材の面でもたいそう異なっており、作者も、受け手も、使われる状況もずいぶんとかけはなれた作品群について、それを貫通するような原理や本質があるとは信じられないからである。さらに、この書物に何を入れ、何をはねるかにについても、動かしがたい断案があるわけではない。というのは、著者の氣力と読者の忍耐と、そして出版上の経済的事由のために、図版と文字の分量をしぼらざるを得ないからである。「中国美術とは何か」という問いは、「歴史的にいつて、中国では、何が美術とみなされてきたのか。また誰によってそうみなされ、それはいつのことであったか」と言い換えても、実のところ問題はなकारう。十分には答えられなかったにせよ、これこそが、本書をつうじて投げかけたかった問題の一つである。どう定義してみても、「中国美術」(Chinese Art)からはみだしたり、齟齬をきたすものが生じてしまうことは、既存の文献を少しめくってみれば明らかである。とすれば、ゆれなく安定した語義をもつものとして「中国美術」を考えることはもはや不可能であつて、残されたのは、誰がどういう視点から枠決めをしたのかを考えていくことだけである。例えば、中国の士人層は、ここ千年あまりのあいだ、「書」こそが最高の芸術であると考えて疑うことはなかったのだが、かたや英語で書かれた概説書では、ルネサンス以後の西洋の伝

統に従つて、自分たちが「美術」(fine art)であると考えた彫刻のほうに、より多くの紙面をまま割いている。しかも彫刻というものの自身、議論の多い分野なのである。フランス人の学者ビクトル・セガレン (Victor Segalen, 1878-1922)<sup>(5)</sup> は、『偉大なる中国の彫像』(The Great Statuary of China)<sup>(6)</sup> という先駆的な業績をもした人物であるのだが、彼は「素材のいかんを問わず、現存する作品群のほとんどをしめるにもかかわらず、中国における仏教彫刻を完全に除外して扱わなかった」というのも、仏教彫刻は、「全く中国的」というわけではなく、むしろインドからの「舶来物」であつて、かつ彼自身が賞賛してやまない純粹に中国土着の作品にたいして、ずいぶん悪い影響を与えてきたと、考えたからである。

同様に、本書には、十分な説明をしないまま書き進めたところもあるが、読者がそれを変だと思わないとすれば、それはそれで興味深いことと言つてよい。例えば、本書の中では、建物について論じなかった。「建築」は、二〇世紀になるまで、中国の美術の一分野として論じられたことはなかったのである。しかしそれは、本書でとりあげた(建築と同じく、理論化がおくれた)ほかの分野ほどには、ひとびとが建物を美しく作り上げようとするところみなかったことを意味するわけではない。あるものを書物に採るか除外するかは、書物の大きさによって決まつてしまう

ものなのである。しかしそれについては、ふれないでおく。したがって、読者諸賢は、本書に写真が載せられている一二〇あまりの諸品が、傑作として由緒ある規範を示しているとか、重要美術品に認定された万人の認めるリストであるなどとは考えないでいただきたい。むしろこれらは、芸術のさまざまなに殊なる歩みを示す代表であるに過ぎない。作られた時点・場所ですでに美術作品とみなされるとともに、現在までずっと重要なものであるとされてきたものもあるが、我々の世紀になってやっと重要だと認定されるようになったものもある。なかには、美術史上の「重要」作品であるかどうかの伝統的な規範からはみ出しており、この書物のような入門書には不向きであると非難されかねないものもある。私が作品を選ぶ際に用いた原則は、大昔から現在に至るまで、中国において芸術であった、と現在の我々が考えるもの、それらの背景を説明するのに役立つかどうかという点である。これらの作品の多くは英国で最近、学術的に研究されるようになっており、詳細については、注釈や書目に細かく記しておいた。これらは、公平に選び出された見本ではなく、(本書における叙述の)出発点なのである。本書は、長大な時間にわたる中国美術について記述しているが、その間に制作された作品のほとんどは失われてしまっている。しかしいっぽうで、現代の標準的な参考図書を開けてみれば、そこには著名な

画家だけで一万三千人以上が載せられている。そこで私は、作られた時点で芸術としてはつきりと認識されていたものに重心を置くことにした。とすれば必然的に、書と絵画にある意味で特権的な地位を与えることになる。しかし、他の地域でも同様だが、中国でも「中国美術」が、現在では思いもよらぬ素材を用いたものにまで広がっていることは、私ももちろん承知している。しかしそんな分野においても、いかにすれば美しくできるかという意識的な工夫は、きわめて重視されてきた。とすれば、世俗的なものであれ、宗教的なものであれ、双方を彫刻として扱ってよいことになる。そのような場合、作品のパトロンや作者について我々は、実際のところ何を知っているわけでもなく、ただ現存する有形の証拠から、何らかのことを、組み上げることができるに過ぎないのである。

この本の構成について、いくらか説明をしておいた方がいいであろう。というのもこの本の構成が、完全には時代順にもテーマ別にもなっていないからである。しかし弁解も不要であろう。ここに提示した作品の集め方が、そのままで何らかの枠組みをなしているわけではないからである。この集め方が、他の構成よりも確固としたものであるというわけではない。この本は、論述の出発点として、作品が使われる情況、芸術品が創造され、使用される社会的・物質的環境に従った。これについては以下のような議

論が為されている。つまり、作品が使われる情況、芸術品が創造され、使用される社会的物質的環境といったことは、ごく最近になるまで、中国美術の研究においてほとんど注意が払われなかったのである。実際、中国的であれ、西洋的であれ、知的伝統の中でごく最近になるまで、「芸術」と機能は両立しないと考えられてきたのである。一九世紀以来、芸術作品は機能をもたない何者か、もしくは、その機能を隠したり、機能を取り除いたりするという視点で考えられてきたからである。

以下の章では、芸術的な場所としての墓のありさま、支配者の宮廷、宗教的な儀式の寺院や祭壇、上層階級の社交生活や交際、そしてさいごに商品市場といったものを記述の枠組みとして設定した。これらは互いに排除しあうわけではなく、多くの作品は幾つかの見出しの下に登場するし、実際いくらかのものは、一度ならず言及されている。そして提示された作品において、それらがどのように意味づけられ、それがどう変化してきたのかということにも配慮した。この書において与えられているような「芸術作品」としての価値づけは、決定的なものではなく、たまたま現代が見出したものであるに過ぎない。

## 原注

〈1〉 V. Segalen (tr. E. Leivieux), *The Great Statuary of China*, Chicago and London, 1978.

## 訳注

〈1〉 The National Gallery. 英国ロンドンにある国立の西洋絵画展示館。一八二四年に設立され、一二六〇年から一九〇〇年までの西欧絵画を二〇〇〇点以上所蔵。所蔵品は主要な西欧絵画の学派、ほぼすべてのよく知られた画家たちの作品が含まれており、作品は時代別に四つの棟に分けてメイン・フロア (Main Floor) に展示されている。

<http://www.nationalgallery.org.uk/default.htm>

〈2〉 National Gallery of Art. アメリカ合衆国ワシントンにある国立の西洋美術展示館。一九二八年に設立され、西洋各地の絵画、彫刻、工芸などを展示。中国でべき美術品は展示されていないが、アンコールなどのカンボジアの彫刻類は展示されている。 <http://www.nga.gov/>

〈3〉 Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770–1831. この芸術を人間精神のあらわれとみる主張は、かれの『美学講義』中に記されていると思われるが、直接それに当たる文章は発見できていない。一般には、ヘーゲルの芸術の定義は「人間精神のあらわれ」であるとされることが多い。原文の「art as the soul of a people」は、訳してしまえば、「人間精

神としての芸術」ということになるが、そのままでは意味が不明なので、右のように訳した。

- (4) この「はじめに」にも記されているとおり、これまでの中国の美術に関する書物は、『Chinese Art』という書名をとることが多かった。ほかに『Art of China』というものもあるが、この書物の『Art in China』というタイトルは、きわめて刺激的かつ示唆的である。

- (5) 原著はセガレンの没年を一九二二年とするが、これは一九一九年のあやまり。

- (6) 『偉大なる中国の彫像』の原著は、『Chine, la grande statue ; suivi de Les origines de la statue de Chine, Paris: Flammarion, 1996.』

セガレンについては、研究論文や翻訳著作集も出ている。

渡邊芳敬「エグゾティスム論の現在——セガレン研究

- (1) 『人文論叢…三重大学人文学部文化学科研究紀要』第九号、一九九二年

『セガレン著作集』全八巻、清水徹・木下誠・渡辺諒編集、水声社

- (7) 俞劍華『中国美術家人名辞典』上海人民美術出版社、一九八一年。